

4年生だけじゃない!!

高島平ロード&日体大記録会

堺が実力者抑え劇的V

高井が28分台マーク

5度目の正直へ猛アピール

晴れ渡る秋空の下で、高島平ロードレースが開催された。この大会は全日本を間近に控えた選手にとって、重要なアピールポイントとなる。

序盤、堺と糟谷は先頭集団でレースを進める。「誰かが引っ張ってくれると思って、それについていく感じでいった」という堺が少しずつ集団を引っ張る形になる。レースが動いたのは15^分付近、中井(東海大)が仕掛け集団のペースが上がる。「思い通りのレースだった」という堺はそのまま集団に食らいいく。残り1.5^分。



東海大・中井(中央)や亜大・木許(左)といった実力者を抑え高島平ロードレースを制した堺(右)

飛び出した木許(亜大)に続き、ラスト500^mで抜き去り、1位でゴールした。

堺は学生駅伝では過去4回、エントリーされるも補欠止まり。チームが優勝しても、嬉しさと自分が走っていない悔しさで複雑な気持ちでいた。しかしこのレースは、レギュラー獲得への大きなアピールになったのは間違いない。

3位でゴールした糟谷は、夏までは不調に苦しんでいたが、夏合宿から徐々に調子を取り戻してきた。復活レースを終えて「優勝を狙っていたが夏前を考えたら今の時点で3位は合格点。今日のレースは自信になった」と語った。全日本、箱根へ向けてロードでの強さを見せつけたチームは勢いに乗っている。(藤縄 瓊美)

出雲の自信を胸に完全復活

数々の快記録が誕生してきた日体大記録会。今回も10000^m最終組で駒大にとって明るい話題が生まれた。出雲で好走した高井と平野の躍進だ。

レースは序盤からモカンバ(アイデム)が飛び出しハイペースで進む。その中高井は終始、土橋ら日大勢が形成する集団で粘りに粘った。そして一流選手の証である28分台をマーク。現在のチームでは齊藤、糟谷に続く好記録だ。夏合宿以降から徐々に調子を上げ始め、臨んだ今回のレース。高校以来の自己ベスト更新で完全復活を果たした。

一方の平野は中盤で集団から遅れ始めるが、すぐに立て直し懸命に前を追う。28分台には届かなかったが、主力に引けをとらない自己ベスト記録でゴール。駅伝デビューを果たしたその走りは自信に満ち溢れていた。

堺だけでなく高井、平野も成長ぶりをアピール。もはや主力は4年生だけではない。彼らの走りが王者継承のための鍵となるはずだ。

10・23 記録ルーム

第30回高島平・日刊スポーツ・ロードレース (上位3位までのみ)

- 1位 堺 晃一(法2) 60分43秒
- 2位 木許史博(亜大) 60分45秒
- 3位 糟谷 悟(政4) 60分55秒

第173回日本体育大学長距離競技会(自己ベスト更新者のみ)

- 【5000m】
- 20組1着 治部丸健一(政3) 14分28秒87
- 【10000m】
- 6組11着 高井和治(政3) 28分56秒38
- 6組17着 平野 護(禅2) 29分14秒92
- 6組30着 太田行紀(商1) 29分42秒59

名将と6人の戦士が語る

出雲の真実

1区 藤山哲隆

初めての出雲駅伝だったから緊張した。でもスタート地点に立つと大丈夫だった。最後は1人になったら向かい風で足が止まってしまった。今後の課題は最後の詰めをきちんとやり調整すること。

2区 高井和治

自信を持って走ろうと思った。できるだけついていこうと思ったけど、東海大の佐藤君が強くて自分の力のなさに気付かされた。長い距離に対応できるように練習を頑張って全日本・箱根も走りたい。

3区 村上和春

齊藤に負担をかけたくなかった。スパートはちょっと早かったかと思った。最後はバテてしまった。でもトップとも差がなかったし、抜かれたのはしょうがない。最後なんで2つ勝って終わりたい。

4区 齊藤弘幸

思った以上に東海大を離せなかったのが悔しい。故障とかレース前の調整段階から反省しなきゃいけない。全日本は万全の状態で迎えて、何区を走ってもチームを引っ張れるような走りがしたい。

5区 平野護

地元だったので声援が大きい中で走れて嬉しかった。自分なりにいい走りが出て、次につながる自信を持つことができた。あとはスパートで逃げ切って、最後の1秒でも早くタスキをつなぎたい。

6区 佐藤慎悟

勝負するしかないと思っていた。みんながいい位置でつないできてくれたのに、それをつぶした感じで悔しいレースになった。全日本ではいい走りをして、自信をつけて箱根につなぎたい。



大八木弘明監督

5区までは思い通り。アンカー次第だと思ってたんだけど、他校の大学とエースの差が出たなという感じだった。佐藤は調子が悪いわけではなかったけど、レースの流れが読めなかった。東海大はスピードランナーも揃っていたし、強風の中で大会新を出して強くなっているなど感じた。でも結果的には駒澤の安定感が示せた大会だった。全日本では中大、日体大、日大あたりがライバルになる。目標は3位以内だけど、やっぱり勝ちにいきたい。アンカーまでに差をつけて、アンカーもどこまで踏ん張れるかがポイントになってくる。